令和５年度　第２回札幌市文化芸術基本計画検討委員会
議事録

【開催日時】　令和５年８月25日（金）18:30～20:30
【場所】　TKPガーデンシティ札幌　カンファレンスルーム2A
【出席者】　（以下、敬称略）

委員

合同会社ペン具（ペングアート）　代表	卜部　奈穂子
北海道大学　名誉教授	北村　清彦
札幌芸術の森美術館　館長	佐藤　幸宏
札幌芸術・文化フォーラム　副代表	白鳥　健志
北海道大学大学院　文学研究院　教授	谷本　晃久
北海道国際音楽交流会　理事長	長沼　修
市民公募委員	成田　真由美
（公財）札幌国際プラザ　調整担当部長	根子　俊彦
市民公募委員	丸山　悠輝

事務局

札幌市市民文化局文化部長	柏原　理
札幌市市民文化局文化部文化振興課長	高橋　亮
札幌市市民文化局文化部文化振興課企画係長	柴垣　孝治
札幌市市民文化局文化部文化振興課	工藤　智弘

【議事】

北村：次第に従って進めてまいります。前回、成田さんから文化芸術の範囲とは何かという質問がありましたので、事務局からご説明願います。

柴垣：（参考資料「文化芸術の範囲」について説明）

成田：ありがとうございます。この参考資料をベースとして札幌市独自のものを作っていくのでしょうか？

柴垣：範囲は国と同じと考えておりますが、本市の計画で何をしていくかについては皆さんのご意見をいただいて整理していくことを考えています。

成田：国があまり意識していないのかもしれませんが、北海道はアイヌ文化があるので、その取扱いには検討が必要だと思います。

柴垣：国が示している範囲の中で言うと、「地域固有の伝統芸能及び民俗芸能」の部分や、文化財という意味でも有形・無形という部分で対象になってくると思います。

成田：承知しました。

北村：ほかに何かあるでしょうか。

国が示している文化芸術のジャンルですが、これでフィックスされているわけでもないですし、新しいジャンルが生まれたり、成田さんのおっしゃるような地域特有の事情もあるので、載っていないものでも何を色濃く見ていくのか、何を扱っていくのかということを考えていけばよいと思います。

谷本：伝統芸能というところは、雅楽から歌舞伎までが和、組踊は沖縄の伝統芸能。アイヌは明示されていなくて、アイヌに関するものは人間国宝などが指定されていない状況です。北海道にはアイヌがありますので、伝統芸能の中にアイヌを排除しないという観点は重要だと考えます。

北村：承知しました。それでは今のお話も含めて確認したものとしたいと思います。それでは、議事資料の説明を事務局の方からお願いします。

柴垣：（検討資料「１　第四期計画の方向性」について説明）

北村：白鳥さんいかがでしょうか。

白鳥：これでよいと思います。見え消しのところは気になっていたところです。コロナ過で検証が難しい状況があったとしても、社会の変革によって求められているもの（デジタル関係）の推進に関しては、第四期計画の方向性に示すべきものと考えていますので、今回示していただいたものであればよいと思います。

北村：今日ここですべてフィックスせずとも、（案）を残しておいて、私たちはこう考えたと見直す機会が設けられれば良いと思っていますがいかがでしょうか。

（一同賛意）

北村：コロナの話は（２）で出ているので、繰り返さずともよいでしょう。では、方向性についてはいつか機会をもって、改めて確認したいと思います。それでは、議事２番、札幌市の文化行政の方向性、文化芸術の価値についてご説明をお願いします。

柴垣：（検討資料「２　札幌市の文化行政の方向性（文化芸術の価値）」について説明）

北村：何かを決める場ということではなく、なるべく意見をもらい、まとまらなくても事務局でまとめますので、言いたいことを言い合っていただければと思います。

まず私が考えることですが、私の専門は美学です。美学とは、ざっくりいうと芸術を哲学的に考察することです。色々なやり方がありますが、まず「芸術とは何か」を考える、つまり芸術の本質を考えることです。これは古代ギリシャから 3000 年近く行われていることです。

ただ、先ほど成田さんからのジャンルの話がありましたが、例えば「芸術は模倣である」、「自己表現である」、「遊びである」と１つに決めてしまうと漏れるもの

が出てきてしまいます。なので、最近では芸術の本質を追及するということを避けている状況です。
それに対して、芸術はどんな働き・作用・機能があるのかということについて、特に 1970 年代くらいから、もちろんそれ以前も宗教や経済、政治などのかかわりが議論されてきましたが、そこからは環境やジェンダー、植民地主義、教育、福祉、病気などとからめて芸術を考えるということが盛んになっています。国の基本法の考え方でも、芸術が持つ他のジャンルとの関わりを考えるということが表現されていますし、この委員会でも基本的にはそういう方向と思っています。その点に関して皆さんから、重点項目についておっしゃっていただければと思います。
20 世紀になってからも自己と他者がどうかかわるのかというのが芸術の問題、関係性の美学というのが語られています。一方で、文化芸術の有効性が考えられるジャンルというのは大事なのですが、注意しなければいけないことがあって、芸術が手段化されてしまうということにつながりかねないという部分です。医療・福祉・教育・まちづくりの現場で役に立ってはいるのですが、手段になってしまうと使い捨てられてしまうという危惧を持っています。
芸術とは何なのかという本質論と、機能論と、もう 1 つはなぜ芸術を問うのか、問題になるのか、私たちはなぜ必要とするのかということを第 3 の問いとして考えたいと思います。大きい話ですが、地球上に生息している人という種族はホモ・サピエンス・サピエンスとよばれますが、肌や目の色が違っても一種しかいません。それはいまから 20～30 万年前に現れた、ネアンデルタール人などの後の種族です。
私たちホモ・サピエンス・サピエンスだけが、弱い種族でありながら、どうして環境に対応して生存し得たのかということを考えたときに、私たちがネアンデルタールとは決定的に異なっていたのは、精神世界をもっているということです。スピリチュアルな感じがするかもしれませんが、例えば人が亡くなった時に埋葬するということ、あるいは動かなくなるということはどういうことかを考えて弔うような精神性。あるいは、墓標を立てたり石を置いたり、文様を刻む。そこに意味はないかもしれませんが、加工をしてモノを置くということが力を持つという精神世界を持っているというのが、ホモ・サピエンス・サピエンスがネアンデルタールと決定的に異なる点と言われています。
体も弱い私たちが精神の力で過去のことを記憶していて、どのように未来に生かすのか、あるいは未来をどう計画するのか、動物を獲るためにどのような罠を仕掛けるのか、厚さ・寒さ対策をどうするかなど考えていって、生き延びることができた。その生き延びるための様々な、脳で考えて様々な道具を作り、儀礼をおこない、文様を刻み、ということ、これはギリシャ語でテクネ＝術・技といわれています。

そのテクネが、ラテン語になってアートと呼ばれるようになりました。つまり、アートというのは、ホモ・サピエンス・サピエンスが困難な時代を生きるための手段・技であった。だからこそ、芸術が私たちに必要だと私は思っています。なぜアートなのかということ、私たちはアートを作りますが、むしろアートに生き延びさせられている、そういった精神性を持っているから生き延びられたと思います。
現代は困難の時代です。ロシアの振興、環境、AI シンギュラリティ、物価高、少子化、人口減少等々・・・危機の時代になると、ともすると文化芸術の優先順位が低く見積もられます。そのとおりなのですが、優先順位が低くなっていくというよりも、順序が逆で、優先順位を低めてしまった、軍事・経済が先だというように、低めてしまったからこそ今日の危機がもたらされたのかもしれません。
抽象的ですが、私の立場からすると、文化芸術はこれからの時代を乗り越えるための重要なツールであって、それが本質的な価値だと考えています。
もし、皆さんの方で文化芸術の価値について何かあれば、ご自由にお願いします。
私の話は別として、資料に記載されている方向性・価値について。この価値や計画のキーワードを念頭に置いて図にしていますが、何かご意見があればお願いします。

長沼：文化の必要性や価値は北村委員長がおっしゃったとおりです。先ほどから話を伺っていて、ずいぶん難しい話が多くて、結局この検討会は何をやろうとしているのかが見えません。つまり、私の思いですが、行政はお金を何に使うのかというところにかなり絞られてくるように思います。文化芸術に関して、どれだけのお金をどこにつかうのか、どういう考え方に基づいて使うのかという見当がしっかりなされるべきです。それがどうかという議論をここでするということではないのですか。

柴垣：基本的におっしゃる通りです。なぜこの話をしているかというと、これから皆さんが考えていらっしゃる、副委員長の言葉を借りるのであればどこにお金を使うのか、何が重要なのかという前提の共通認識として、これでいいのかということ。また、様々な分野に活用していくのが重要ではないかということ。もちろん感動などの本質的価値はありますが、それだけではないのではないか、という前提条件を共有したく、このお話をして、ご確認いただきたいということで、こちらの話題を振らせていただいています。

長沼：よくわかりました。

成田：まず、私が思う文化芸術とは、「人が作ったもので心が動くもの」です。なので、心が動くということ自体に価値があると思って発言していきます。こういう抽象的な図の受け取り方は千差万別ですが、私のように文化芸術は本質的な価値だけで価値があると思っている人間からすると、本質的価値がない経済・社会価値があるというのは違うのではないかと思います。本質的な価値があるからこそ経済・社会価

値があるので、本質的な価値をおろそかにしてはいけないと思います。なので、それを表現する必要があると思いました。

あともう１つ。資料１ページ目の文化芸術の価値。最後に世界平和の礎になるものであるとありますが、文化芸術はイコール平和の象徴だけではなく、すごく力があって危険なものでもあると思っています。具体的にはプロパガンダ。行政が計画をするので、中立的な関わり方も気にしてほしいと思います。

北村：2 ページの図ですが、平面的に書くと、成田さんの言うような、重なっていない部分があるようなイメージを持たれるのかなと思います。もう少し、立体的な、本質的価値が土台に合って、上に載っているような見え方だとよいのかもしれません。図式化は、立体化したらしたでまた論点が出るかもしれませんが、事務局の方で工夫をしてみてほしいと思います。

2 点目、芸術が危険な力、毒や武器にもなりうるというお話がありました。前衛的な芸術を排除するようなことも、理屈として逆に使われるということがあるのではないか。つまり、プロパガンダとして危険性を持ちうる芸術を行政がどう整理するかということでしょうか。

成田：質問の意図とは違うかもしれないが、例えば助成金を出すときに、内容に口を出すというようなこと。表現の不自由展で炎上したような、内容に口出しを始めるということがどうかと思っています。

北村：20 世紀のナチスドイツでは芸術はプロパガンダに使われ、全部破壊されるような政治介入がありました。当然それは現在の私たちにとっては反省点としてあらためて確認しなければいけないのかもしれません。そういう危険がないわけではない。芸術の場という様々な性格、負の側面も含めた性格に対して、十分認識しておく、そういう力があるということを認識しながら、それに対して排除することをしないということでしょうか。微妙な言い回しですが。

他にこの点を含めていかがでしょうか。

丸山：ここまでの北村さんの文化の尊さに対する学術的な話や、成田さんがおっしゃる図の捉え方をお聞きして、2 つ感じました。1 つは、私は大学時代に文学部で 1960 年代のアメリカの研究をしていました。そこがどうなっていたかというと、黒人の奴隷制度から始まる法的差別があって、それに立ち向かうためにデモ行進などの市民権運動がありました。私が研究していたのは、市民権運動の行進の中で歌が歌われること。黒人の歴史がどうあって、どういう歌を作っていったか、その中に自分たちの意識をどう表していくかということを研究していました。

当時、運動の前半では黒人の歴史や精神世界が前面に出ていて、選挙権が与えられるようになって法的差別がなくなりました。次は、経済的な問題だということになって、問題は黒人・白人ではなくて、経済的なところだと。メキシカン、プエリト

リカン、白人でもアイルランド移民、アメリカ先住民の問題でもあるという意識が芽生えて、人種を超えた連帯意識が芽生えました。
そういった中で、運動の中で歌われた歌も性格が変わっていって、それまでは黒人音楽だけがルーツだったのが、いろいろな人種・エスニックの特質が表れた歌になっていったという変遷がありました。
メキシカンはこういう歴史があってこういうことを感じてきた、プエリトリカンは・・・ということをお互いに理解して、歴史を尊重して、運動の結果はすぐには現れませんでしたが、その後続いていく中で、それぞれ感じてきたこと、戦ってきたことがその後の運動につながっていった歴史があります。そういう部分、資料に出てくる他者と共感する、世界平和の礎になっていったんだろうなということは、研究で感じていたことです。それは本質的な価値、歌うことで感じつつ、お互いを認めていったんだろうと。
2 つ目はもっと簡単なことです。私は小学生の子供がいて、今苦労しているのが、札幌市 10 区のそれぞれ区にあるものを答えるというものです。昔、教育文化会館で演劇ワークショップをやった時に札幌の歴史をテーマにしていて、札幌市の街並みを探索するのですが、演劇が好きで参加した人たちが札幌を学ぶのにいい機会になりました。それは演劇が好きな人が本質的な価値を感じつつ、札幌市のことを学んで、シビックプライドにつながったということです。そういったことが、文化芸術の尊さにもつながると思います。以上、感じたことを述べさせていただきました。

北村：歌を歌う、自分たちの誇りとして歌うということが団結を生み出したり、社会的問題の解決につながったりする。短期間ではなく半世紀、あるいは芸術だけで解決できるのかという批判はあるでしょうが、それがなければ解決の道筋も見えないということで、重要な役割を果たしていると思います。
演劇の話は、「わが町」ですかね。ワークショップは有効だと思います。教育の場でワークショップに参加できるとよいと思います。そのあたりも含めて、このあと重点のところで考えてほしいと思います。
他にいかがでしょうか。

白鳥：私も資料をもらったときは正直ここでは何を言いたいのか判断に困りました。これまでの計画（第 3 期まで）では、文化の本質は何かという話をしながら、札幌市はどうやって文化を波及していけばよいかということを語っています。札幌市まちづくり戦略ビジョンとの連携が第 2 期から出てきていますが、これから札幌が歩んでいくところと文化芸術がどう重なるのかということを計画で語っていくのがよろしいと思います。長沼さんがおっしゃったお金の使い方はその次の切り口として大事な部分でもありますので、慎重に議論すべきと思います。

本日のここまでの時間は、何が大切かという定義について話し合ってきたと思いますので、今日の残された時間は、今後重点的に行うべき事柄を具体的に話し合うことが大切だと思いますが、いかがでしょうか。

北村：そのとおりに進めていきたいと思います。それでは続けて白鳥さん、前回の宿題となっていた重点的に取り組むべきことについて、お願いします。

白鳥：では。私の考え方を述べさせていただきます。

第一に、まちづくりと文化芸術の関係を基本計画の中に明確に謳っていきたいと思い、お声がけがあった時に委員を引き受けました。まちづくりとの関係を、札幌市まちづくり戦略ビジョンと関連付けていますが、もう少し具体的に謳ってもらいたいと思っています。

次に、文化と他分野の連携強化です。経済分野との連携は国でも示されていて、そういった部分をどういうところでどうしていくのかということを整理しながら謳った方がよいと思います。例えば、雪まつりと国際芸術祭の連携に関しても、利点等々を論理的に示すべきだと思います。ただ、先ほど委員長におっしゃったように、それによって文化芸術が埋没する、消されることがないようにしなければいけないとも思います。

加えて、観光とまちづくりとの関係で言うと、DMO（観光地域づくり法人）というのがというのが注目されています。DMO は、官民の幅広い連携によって、観光地域づくりを推進するために、民間の法人組織を創設しつつ行うというもので、官に頼らないまちづくりの側面を持つもので、私としても個人的に惹かれるものがあります。現在、研究者の方たちが、その進め方などについて論議していますので、その動向について注目したいと考えています。

また、創造都市との関係性がこのペーパーにはなかったと思いますので、疑問に思いました。

最後にもう 1 つ、アーツカウンシルという動きが日本全国で進められています。地域に合った総合文化の支援みたいな話で、地域ごとに異なります。札幌市に適した総合芸術の支援をどうするのかということ含めて、研究する必要があると思います。前回の検討委員会で評価された支援事業にも結び付くので、深く検討したほうが良いと思います。

北村：アーツカウンシルの話は 10 年くらい前から札幌でもありましたが、立ち消えていて、行政から離れて作るのは難しいのかもしれないですが。

他はいかがでしょうか。

佐藤：私は美術館で働いているということもあって、現実的な話になります。ここに書かれているような願いや目指す姿は色々な議論がありますが、なかなか難しいところだと思います。それはいったん置いておいて、この中で、文化芸術の保存や活用と

いうことがすごく大事だと言われているし、誰もがそれに触れられる機会が大事ということも当たり前だと思います。これについてはこの書き方自体に異論はありません。

ただ、１つ現場で働いていて思うのは、保存して活用することは大事だが、それは人間がやることなので、担っていく人材というのが重要という点です。前回の委員会でも担い手の確保が重要という指摘がありましたが、学芸員のような専門家、それ以外の支援をするような組織も含まれるし、もちろん地域住民などによるボランティアなども含まれるのではないでしょうか。ただ、その人材というのが少なくとも専門家に限ると、美術に関しては少なくなってきているという現実があります。先日も新聞で金沢 21 世紀美術館の人が集まらないという記事がありました。お金に関しても国立博物館がクラウドファンディングを行ったり、お金があっても人がいなかったりという状況となっています。一般的に専門家というと、保存と活用・公開が対立するような行為と捉えられてきて、専門家がいると保存のために活用を制限するということもあって、大臣が「学芸員がガンだ」と発言したりもしていました。

しかし意識が変わってきて、恵庭で博物館関係の会議があったのですが、「ミュージアムと観光」がテーマで、学芸員の発表の中でも、公開して活用することは資料が痛むことなので制限していたが、逆に今は活用しないと保存できないという認識が広まってきています。

ただ、実際に専門家、おそらく音楽なども同じだと思うのですが、専門家の確保もそうだし、一般の担い手・ボランティア・一般市民の参加、例えば国際芸術祭で多くのボランティアが参加していますが、3 年に 1 回なので、1 回開いて終わってしまっています。そこで活躍した人たちを次の芸術祭までつなぐだけでなく、他の文化観光、普通の観光でもいいですが、挙げられているような活動に生かせるように、継続性の視点も大事だと思います。実際、スポーツの方では、オリンピックなどの国際大会のボランティアをどう持続的に生かすかという議論があると思いますが、アートでもその場限りにしないことが重要だと思います。

それをどう盛り込むのかは議論があると思いますが、人間がやっていることなので、人材がいないと、文化芸術を効果的に活用することも難しいと考えられます。少しでもそういう環境、あとはハード、当然お金もかかりますが、そういう人材を集めるというような視点が入っていてもいいのかと思います。

北村：前回、丸山さんが担い手の話をしていましたが、担い手をどう確保するのかということ、それがなければ白鳥さんの指摘に合った観光経済との連携もできないという話かと思います。例えば、SIAF でもボランティアを募集して、成田さんも 500 m、SCARTS でもコミュニケーター、佐藤さんは芸術の森でボランティアの方と関

わりがあると思いますが、それをどう持続的・組織的に育てていくのかという仕組みを考える必要があるのではないか、継続が大事ではないかという話だったと思います。他いかがでしょうか。

卜部：私は障害のある児童のサポートをしていて、その関係で 2 点。第 3 期でやられていることは継続してほしいのですが、プラスしてほしいことがあります。

例えば「ハローミュージアム」は小学 5 年生だけが対象です。うちには、たくさん子どもがいるのでチラシをもらってくるのですが、それは家庭環境によって、行こうという保護者の子どもでなければチャンスに巡り合えないというところがまだまだあります。

「ハローミュージアム」のように全 5 年生が行けたり、アーティストが赴いたりというところが平等な意味を持つと思います。子供たちの機会充実に、学校に出向く機会を多くするなどがあってよいと思います。「お届けアート」もやっていますが、２００校のうち 3 校ということで、少なくてもったいないと思っています。

2 点目は、障害のある方たちのサポートをしている立場からアールブリュットを取り入れてほしいと考えています。アールブリュットがいいのか、ボーダレスアートがいいのかという理念的な話もありますが。第 3 期ではステージ 3 の「文化芸術を生かした様々な事業との連携強化」という項目がありますが、それだけでなく、芸術性の評価もしていただきたい。福祉との連携となると、啓発なのかそれともアートなのかという議論があります。アールブリュットの芸術性の評価は議論されていますが、障害のある市民もたくさんいるので、広がっていくとよいと思っています。

北村：例えば、佐藤さんの担い手の話と合わせると、子どもたちが学校だけじゃなくて児童館などで放課後過ごす中で、アーティストが配属されて、放課後過ごすような仕組みも面白いと思います。そこで丸山さんがおっしゃったようなワークショップがあってもよい。各家庭の状況によって、家族単位で行ける場合といけない場合があるというよりは、学校単位の方がよいということもあるでしょう。どういうレベルで支援するのが効果的か考えてもよいと思います。

あとはアールブリュットですが、これは多様性や社会包摂というキーワードと重なってくると思います。一世紀も前に始まった運動が、なぜ今日また取り上げられているのか、佐藤さん美術館の館長としていかがお考えでしょうか。

佐藤：それはやはり最近ダイバーシティ、社会包摂、インクルーシブなどという考え方の変化と密接に関わっていると思います。昔風に言うとアウトサイダーアートですが、プロの芸術家ではなくて、昔だったら素人とみなされた芸術が評価されてきているというのは、既存のアートへの考え方に対する疑念というのが 1 つの背景だと思います。様々な要因が関わっていると思います。

もう１つは、アートが持つ力について、大脳生理学的な研究も最近ではされているようで、美しさを感じた時に人間は快感物質が分泌されるといった説もあります。イギリスでは病院でアートを取り入れることで投薬量が減るということで、実践して成果を上げている病院もあります。

私も詳しく研究してはいないですが、子どもたちの作品には生きる力、人間の根源的な力が表れていて、そういうところが見直されてきたということなのではないかと思います。

北村：ありがとうございます。アールブリュットがどういうものかなんとなくわかっていただけたと思います。まさに札幌市として重点的に取り組むべきこととして、福祉的、障害児、専門的な芸術教育を受けていない人たちの作品をどう取り扱うのか、積極的に取り扱ってほしいという話でした。

丸山さんはどうでしょうか。

丸山：第３期のなかで、重点的に打ち出したのが他分野連携だと思います。実際に色々、SCARTS などでも取り組んでいますが、ここから連携をさらに進めていくとなった時に、よりできるようにしていくには、企画する側が他分野をどれだけ意識できるかというところが大事だと思います。

企画する側は、例えば芸術と文化と環境をコラボさせようとした場合、それ自体は新たに環境に関心を持つということで意義がある反面、それをどうアピールをしていくかというのは、広報する側がどれだけ、そういう尊さをアピールできるか、広報する側にそういう意識がないと広がらないと思います。SCARTS だと NoMaps もありますが、文化芸術をもっぱら広報する人たちが、NoMaps のメディア芸術・テクノロジーを文化芸術の人たちにどう広げるかというところまで考えていくというのが、ここからさらに他分野連携を進めていくうえで大事な姿勢だと思います。

福祉の観点で障がい者向けの企画をしても、文化芸術に詳しい人がどう福祉に関心を持つか、それは担い手や施設、そういうところが、今後持っていくべき課題だと感じています。

北村：他分野との連携をするにしても、佐藤さんのおっしゃった担い手が必要ですし、現在の札幌市だと SCARTS などが中心になって行われるのだと思いますが、それで十分なのかどうか。あるいは白鳥さんが言ったようなアーツカウンシルのような組織を作って他分野と連携するという形になると進むのか。

根子さんはどうでしょうか。国際交流などの関係もあるかと思いますが。

根子：今回の資料を見て気になったのが、札幌市ならではの文化という単語。先般も話をしたように、札幌のプレゼンスを高めるための文化芸術というのはあると思います。翻って見た時に、例えば演劇や、札幌市芸術文化財団の活動も華々しいですが、もう少しサブカルチャー的なことや若者目線の話。札幌としての売りをもう少

し広くとらえてもよいのではないかと感じています。
例えばゴールデンカムイのような漫画やアニメが世界的に流行って、北海道・札幌が聖地化されてる状況があります。どこまで現実化されているお話かわかりませんが、マンガミュージアムの話題もあって、そういった視点でもう少し広く芸術をとらえて、若い人も巻き込むことも必要なのではないでしょうか。
それが結果的に交流人口拡大などにも結び付くし、札幌は他のところと違うということを示すことになります。
こういった文化芸術計画を見ると、どこの都市でも同じことが書いてあって、ある程度仕方がないことで国の計画をいかに身近にするかということも重要だと思いますが、それだけでは物足りという気がします。
その辺、例えば産業との連関など、芸術の手段化という問題はありますが、視点としては必要だと思います。
あとは担い手のお話が出ていましたが、確かに札幌は、ボランティア活動が非常に盛んなエリアだと思います。
例えば、今度の日曜日に北海道マラソンがあってボランティア多数駆り出されますが、そこに参加するスマイルサポーターズという札幌市のスポーツボランティアが、さらに SIAF（国際芸術祭）をお手伝いしませんかという案内を受けていたりという垣根を超えた動きがあります。
先ほどアートコミュニケーターの話もありましたが、専門家と市民のつなぎ手など、そういう人が担い手として育っていけば札幌らしさのあるまちづくりにつながると思います。
最後に視点が変わりますが、技能実習制度が恐らく今後転換されて、外国人の労働者としての受け入れが増えていきます。そうすると多文化共生・ダイバーシティ、国際化の視点が札幌でも重要になってくるので、文化芸術の面でのつながりも考えていかなければならないのではないでしょうか。

北村：２、3 か月前にマンガミュージアムの記事が北海道新聞に出ていて、本気かどうかはわかりませんが、札幌らしい、札幌独自の、他都市とは違う特色を示すことができるとよいということですね。
ところで、ボランティアネットワークというのがありませんでしたか。例えば芸術の森、近代美術館、SIAF などばらばらになっているものをつなぐことを ACF でやっていませんでしたか。

白鳥：ボランティアという側面を見るのであれば、ブイネットがやっています。ただ、ボランティアというのは、これをやりたいという方向性が違うと、プラットフォームを作ってもなかなか乗ってこないという実情があります。そこによい味付けがあれ

ば札幌ならではのネットワークができるのではないかと思いますが、なかなか難しい。この機会になにかアイディアがあればいただきたい。

北村：多様性や国際性といったことも、外国人の人口が増えてくるにしたがって、ますます重要になってくるだろうということですね。

成田さんはいかがでしょうか。

成田：文化芸術の価値ばかり考えていて、連携の重点は、実はあまり考えてきませんでした。ただ、この資料を読んでいて思ったのは、札幌市立博物館の構想はどうなったのでしょうか。博物館活動センターは第 3 期に載っていますが、前回のお話で第 4 期の目玉が欲しいということだったので、これが先に進んだらよいかなと思いました。

あとはアーツカウンシル。

北村：博物館は現状どのような状況なのでしょうか。

柏原：かなり以前から基本計画を作ってきて、令和元年 12 月に中島公園を建設場所とすることを公表したところです。ただコロナもあって、他の博物館でも集客に苦労している現状がある中で、アフターコロナを見据えた集客や市民に対する機運醸成を行っている段階。こうした状況のため、来年再来年に箱ができるわけではなく、そのあたりの検討を進めているところです。

北村：ありがとうございます。

谷本さんはいかがでしょうか。

谷本：2 つありまして、1 つはステージ 3「文化の保存と活用」、あるいは（次期計画想定の）「文化資源の保存と活用」について。いま札幌市の文化財課の方では、今年度から札幌市地域文化財認定制度を走らせることになっています。

どういうことかというと、いままでは指定文化財が一般的でしたが、その後は登録文化財、そして認定文化財と幅を広げています。認定の仕方として、市民の方が自己推薦もしくは他薦、応募したものを最終的に文化財保護審議会で相談して認定していくということをしようとしています。その後で登録、指定と進めばよいという考え方。

恐らくこれは、地域の価値を地域の方がどう考えているのか、あるいは逆に言えば応募・推薦してくれる個人や団体はこういうことに関心が深い方と思われます。そういう方々と連携していくということが活用につながっていく。そういう方々との連携は、副委員長がおっしゃったように助成など一緒に何かをやっていく仕組みが考えられるのではないかと思っています。

何を申したいかというと、文化財認定制度とうまくコラボレーションしながら、札幌市役所の文化芸術の推進に資していくということができれば立体的になるのではないかと思います。

もう１つは、ステージ２「未来への布石・育成・支援」について。ほかの委員の皆さんもおっしゃっているが、人材育成に何らかの手当てができないかということ。特に若手の方。

私がイメージしたのは、札幌ならではのということで、思い付きですが、昔、昭和の時代に北海道庁で海外への芸術家派遣事業がありました。毎年色々な方がヨーロッパに行っていましたが、１人だけカナダに行った芸術家がいました。当時札幌に住んでいた砂澤ビッキ先生です。砂澤先生がどうこうということではないのですが、今も個性的な北海道ならでは、あるいは札幌ならではの地域に根差した新しい芸術を創造して、それが今も評価されています。

これはやはり、その制度によりカナダに行って、カナダの芸術と対話をすることによって磨かれたいうところがあるのではないかと思います。北海道の歴史をやっている人間からすると、大変大きいプロセスだったのだろうと思っています。

なので、何らかの形で札幌に還元できるような立て付けで、文化芸術施策として後に残るような人材育成への助成ができればよいのではないかと思っています。

北村：札幌市が始めようとしている文化財の認定制度について。自己推薦のような形で応募をするものですね。そういったものがあれば、札幌市も助成できるのではないかということ。

それから砂澤ビッキさんのお話ですが、道の方では未来チャレンジ資金というのがあって、芸術分野でも今年３人選ばれています。音楽が多いですが、あとは演劇。メキシコに派遣されることになっています。そういう若手、40 歳くらいまでの人を、道では５～６年継続して支援しています。

札幌市としてそういうことができるのかどうか。１人１年留学させると数百万という金額になってくるので、どこから原資を用意するのかという話にはなりますが。余裕があれば、ありかもしれないと思います。

副委員長は全体をお聞きになって、いかでしょうか。

長沼：最後に私のとても関心のある話がありました。道が海外に芸術家を派遣するというお話です。実は私は、北海道国際音楽交流協会（HIMES）の理事長という立場でこの場に出席しておりまして、これは何をしているかというと、若手音楽家を支援して海外に派遣する事業をしております。そのためにいろいろな方から寄付をいただいていて、私は 10～12 月で 5～60 件企業を回ってお金を集めております。それにより派遣するということをずっと続けています。

実は札幌市にも何度か応援をお願いしたが、直接、恒常的にお金を出すのは難しいというご回答をいただいています。

最近は困ったことに、企業に行くと、「うちは PMF に寄付しているから」と言われます。ＰＭＦに十分に出しているので、お金がないと。おかしいなと思うのは、

海外にお金を出して、札幌はそんなにお金があるのかと。
海外で音楽をやっていた姉からも話が入ってくるが、札幌は海外ではとても評判がよいそうです。札幌に行った音楽家が大喜びをしているそうです。費用負担をしてもらって素晴らしい先生に教えてもらえる。それはそれで素晴らしいことです。
しかし、本当に札幌にはそれだけの力があるのかと、冷静に考えてみる必要もあるかもしれません。札幌市の文化予算のかなりの部分がそこにつぎ込まれているだろうと思います。そう考えると、（PMF は）もう 30 年やってきていますが、そもそもＰＭＦはバブルの時に出来上がって、北京が嫌がったものを札幌が引き受けたという経緯があります。それだけでも非常に札幌の負担が大きいものだと思いますが、札幌の人は寛容で、引き受けている。それはそれで素晴らしいことだが、もう少しバランスが取れないかなということを思っています。そうした考えがあって、先日、事業の見直しの話をしたところでした。
海外派遣の話が出たのでこのお話をしましたが、それはさておき、海外で勉強させたり、海外から呼んだり、東京などから力のある人・影響力のある人を呼ぶことはとても大切だと思います。それが刺激になって、札幌に文化のエネルギーの芽生えになります。
明治の初めにクラークさんをはじめとするお雇い外国人が来て影響を与えたことは明らかです。そういうことをもっと積極的に札幌はやるべきなのではないかと思います。
例えば芸術祭で坂本龍一さんは来られなかったですが、大友康平さんを呼んできました。でも実際にいる期間は一時的です。そうではなく 2 年いてくれれば全然違うと思います。自分はジャズの方も色々とあちこち遊び歩いていますが、例えば札幌はベーシストが弱い。しかるべきベーシストに札幌に 2 年いてもらえば札幌のジャズのレベルがとても上がると思われます。例えばそういうことに支援をするとか、音楽に限らずですが、そういうツボになる人を毎年色々なジャンルで呼ぶようなことも 1 つの方法としてあるかなと思います。
それから、この計画の第 1 期の会議に参加した時のことを思い出しました。まちづくりと関わりますが、美術家、アートに関わる人達が集まるまち。例えば大通にある札幌市資料館から後ろは地価が高いところですが、例えばあそこに税的な対応をして、ギャラリーを開いたり、絵描きのための何かをしてくれれば支援をしますよということになると、あのあたり一帯が文化芸術の街になります。あるいは創生地区など、財政的な支援をしてそこから芽が出てくるという、畑づくりみたいなことを積極的に行っていくべきではないか。そのためにはお金がいるので、どこかからというならさっき言ったような部分もある。やっていることは素晴らしいので、毎年ではなく 2 年に 1 回などにするという方法もあるかもしれない。

シティジャズもそうで、東京からギャラの高い人がたくさん来ますが、その必要があるのか。日本中に色々なジャズフェスはありますが、ジャズかどうかわからない、ポピュラーな人までくるようなことでよいのかといった議論もあります。そういったことも含めて様々検討が必要だと思います。

もう１つは博物館の話。視野に入っているようだが、博物館は地域にとってとても大事で、歴史をしっかり残していく、過去を見ることは未来にそのままつながるものと思います。

例えば琴似に屯田兵村があります。私は実はその末裔なのですが。兵屋がありますが、これはレプリカで本物ではありません。本物は琴似神社の裏にありまして、これはボロボロで今日明日にも朽ちてしまいそうな状況。道の管理だとは思いますが、北海道に 4 万人はいってきた人たちが、最近はアイヌの敵みたいにいわれることもありますが、北海道の歴史を考えるときは札幌に最初に入った屯田兵の住んだ家を、そのまま残すということはとても大事だと思います。

しかし忘れられてボロボロになっています。そういうものは探していくとたくさんあります。啄木の彼女だった人の家には資料が山のようにあったり。まだまだそういったものが札幌にはたくさんあるので、そうしたものを発掘するなども必要なのではないでしょうか。

谷本：よくご存じですね。確かにあるんですよね、東区に。

北村：長沼さんは前回も大規模事業の見直しの話をおっしゃっていましたが。例えば、劇団の人・作家を招いてそこで 2〜3 年劇団を作ってもらって、演劇祭を行うようなこともしています。そんな形で、札幌独自の特色のあるジャンルで、刺激を与えるというのも面白いかもしれません。

それからまちづくりの関係で、今、札幌のギャラリーはどんどん閉鎖されています。お金の問題だと思いますが。それだけ作家が発表する場がなくなっているということです。これから札幌の 10 年後は大きく変わっていくと思います。

その時に、ギャラリーなどがちゃんと運営できるような形で、集中的にどこかに、創生川の東でもよいし、札幌駅の北に劇場もできますが、札幌が芸術のまちであるということ、根子さんの言葉を借りるのであれば札幌の独自性、メリハリをつけた形で事業が展開できるとよいのではないでしょうか。

一通りうかがって色々なアイディアが出ました。他にはないでしょうか。

それでは、4 番の議題について事務局からの説明をお願いします。

柴垣：本日、多くの意見をいただいていますが、一応こちらでご用意をしております。最終的に色々な事業を紐づけるときにバランスを考慮する必要もあり、固めたものではありません。本日意見を様々頂いておりますが、一旦これはそれを踏まえていないたたき台ということでご理解ください。今後、文化芸術団体にもご意見をいただ

きたいと思っていますので、それも踏まえて、次回に事務局から素案のようなものの全体像を示したいと考えています。いったんこれは本当の仮の仮とご認識いただきたく存じます。

（検討資料「4　4つのステージと施策の再構築について（たたき台）」）について説明）

頂いた意見は反映してまいりますが、この場でおっしゃりたいことがあれば承りたいと思います。

成田：少し気になったのが、文化資源の保存活用。施策3－1：文化遺産・自然遺産の保存と活用の自然遺産は文化ではないのではないですよね。あとは、将来の文化芸術を活性化させるための調査・研究というものがなくなっていることがすごく気になります。というのは、遠い将来に影響するのでざっくり消えてしまうのは残念だと思います。

あと、多面的なアーティスト支援が一番気になってます。、長沼さんがおっしゃったように来てもらった方から教えを請うのも大事ですが、アーティスト・イン・レジデンスで、海外・道外のアーティストに札幌を見てもらい、何かを持って帰ってもらうのも大事だと思っています。

白鳥：私からも一言。今まで、ほぼ、お金をどう活用するかという話だったが、新たにどうお金を集めるかということも計画の中に謳えないでしょうか。つまり、官民連携で、官にお金がないから民の力を使う。札幌市にはまちづくり基金というのがあって、そういうのを芸術文化の中で活用できないでしょうか。基金の性質によっては、企業として損金扱いできるので税金対策になること。文化芸術でもそういったことができればよいと思います。そういうシステムの研究も検討の中に含めてもらえないでしょうか。

柏原：実は文化芸術に関してはすでに基金があります。ふるさと納税が入る前までは、10年くらいまでは3億ぐらいあったが、いろいろ入るようになって現在は8億。その果実で助成も行っています。企業からのお金も引き受けられるようになっていて、ご承知のように企業版ふるさと納税、損金と税控除で9割バックというのはすでにあるところです。

北村：それでは、本日多くの意見が出たので、事務局としては大変かもしれませんが、次回素案の提示をお願いいたします。

最後に全体を通じて何かあるでしょうか。なければ事務局にお返しします。

高橋：（事務連絡）

北村：それでは、これで第二回検討委員会を終了します。皆様お疲れ様でした。